

世界の人びとのための JICA 基金活用事業
終了時活動報告書 (2023 年度採択案件)

1. 業務の概要	
(1) 案件名	「ラオス：少数民族女性と障がい女性を支える製品づくり 日本研修」
(2) 実施団体名	NPO 法人 Support for Woman's Happiness
(3) 実施期間	2023年9月1日 ~ 2024年1月31日
(4) 実施国	ラオス
(5) 活動地域	ラオス（ビエンチャン） 日本（東京、関西、北海道 エリア）
(6) 活動概要	<p>①活動の背景： Support for Woman's Happiness は2017年に障がい当事者のオファーを受けてラオスで障がい作業所ソンパオを障がい当事者と共にオープンした。当初は5名ほどにミシンの訓練を行う小さな作業所であったが、ラオス全土から訓練を受けたい障がい当事者が集まり、2023年現在、ハンディクラフト部門、農園部門に35名が所属している。障がいがあっても最低賃金をもらえるような作業所づくりを目指している。コロナ禍の間も、少数民族村と作業所での製品づくりを進めてきた。2021年度の世界の人びとのための JICA 基金採択事業では靴作り・雑貨作りが大きく発展した。今期は日本での研修を体験し、ものづくり・福祉ともに自立性を養っていききたい。</p> <p>②活動の目標： ラオスの障がい当事者がこれまで習得してきた技術をもとに、日本のものづくりの現場を視察したり福祉施設を視察して自発的なアイデア構築に繋げる。 福祉の現場視察と日本の支援者と交流することでリーダー育成の一助としたい。3期にわたり指導してきた新作の製作とチームのステップアップにおいて、海外での研修は目標の1つであった。この研修をきっかけに当事者のより自発的な活動が活発になることを目的とする。 また日本の福祉のあり方やバリアフリーのまちづくりから、今後のラオスの福祉構築へのヒントを得る。</p>

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

1月12日 成田空港着 で京都に向かう（京都泊）

1月13日 関西ラオス友好協会の皆さんと交流、西陣織会館、産業センター視察

緊張した様子がみられたものの、関西ラオス友好協会さんが京都市内を案内くださり、徐々にリラックスしていった。車椅子ユーザー・足の障がい者の移動は大変なため、事前に施設側にオファーをしたり、車椅子レンタルやスロープなどの活用をすることを1日を通して学んでもらった。特に日本の障がい者用トイレの綺麗さ、広さ、使いやすさに驚いてたようだ。施設ごとに車椅子レンタルがあることにも感銘を受けていた。

西陣織の柄や産業センターのシルク織などラオスとは違うデザイン・光沢を見学。ラオスよりも洗練された展示方法に興味をもつメンバーもあり、熱心に見学していた。みやこめっせの産業センターではQRコードを読み込むと各言語の説明ページに飛ぶことができ、ラオス語はないもののタイ語のページがあるためラオスの人々も読むことができた。この形式は今後、障がい作業所でも取り入れて行きたい。

また、日ラオ60周年記念の際にラオスから京都市動物園に贈られた象4頭に会わせてもらうことができた。ラオスではこうして動物が丁寧に飼育されるというのは身近でないため、アニマルウェルフェアの勉強にもなり、日ラオの友好が国家間で続いていることも改めて教えることができた。

（基本的な移動支援は関西ラオス友好協会さんが有志で実施してくれました）

1月14日 和食体験 都内に車で戻る

ボランティアメンバーが移動サポートに協力してくれ、狭い市場や市内のお土産店の視察を実施。ケア側の人数が十分でないため、運営側としては大変ありがたかった。京都の老舗で高価すぎず車椅子でゆっくり座れる和食は少ないが、「松長」がお店をシェアする形で和食体験を提供してくれた。

ラオスには日本食レストランが数店はあるものの、高価でラオスメンバーは行くことができないことと、本場の食材・盛り付けを見れる機会として場を設けた。関西エリアのサポーターさんたちが合流してくれ、浴衣を着せてくれたり近所の神社に連れて行ってくれたり、交流を行った。市内のお土産店では扇子や和雑貨、ポーチなどの色展開・柄展開に着目しながら視察。

1月15日 衆議院会館訪問 前外務副大臣 山田賢司代議士に活動の報告 に伺う

SIPHAN と ONECHAY はラオス語での報告となったが、リーダーの PHOUTHALEE VONGSAMAI は英語で直接代議士と話すことができた。SIPHAN と ONECHAY はオフィシャルな場で発言することはまだ少なく、緊張していたものの、障がい者の発言に耳を傾けてもらう自信に繋がったと思われる。

外苑前 Flat Base をかりて 活動報告会実施。参加者は会場への来場者35名・オンラインと後日の録画視聴34名で70名近い方が参加してくれることとなった。

当日の様子については録画配信用のURL

<https://youtu.be/SEhLWDD7hSc?si=qzvv9yVHC-CKZAxB>

で確認できる（限定URL）。なお、会場にはNHKワールドの取材が入り、後日の取材と合わせて放映される予定である。

1月16日 旭川に移動 美瑛の青田町議、カムイ大雪バリアフリー研究所の只石さんに福祉体験のツアーをアテンドしてもらった。

<https://npo.kamui-daisetsu.org/>

旭山動物園では牽引できる雪上で動ける車椅子を体験した。ラオスでは見たことのない雪国の動物（ペンギンや白熊など）に驚くとともに、その工夫された展示方法に関心しきりであった。また動物園のスタッフの方達の丁寧さ、移動のサポートにも心から喜んでおりラオスでも障がい者への理解が深まってほしいと切に願っていた。国に帰ったらこの体験を多くの障がい当事者に伝えたいとのこと。

パラ活センターではボッチャ体験、パラスポーツ用の車椅子体験、電動車椅子を初体験した。ラオスでは電動車椅子を見かける機会は少なく、メンバーも楽しみながら操作を覚えて試乗。現在の舗装されていない道の多いラオスでは使いこなすことが難しいが、5年後・10年後に向けて見せることができよかったです。

当日の様子は北海道新聞に掲載された

<https://www.hokkaido-np.co.jp/article/965177/>

ラオス展でお世話になっている おかだ紅雪庭 訪問でき、女将さんやスタッフの皆さんにもご挨拶できた（おかだ紅雪庭ではラオス展のつながりからビアラオも置いていただいている。徐々に旭川でのラオス交流が広がりつつある）。

1月17日 カムイ大雪バリアフリー研究所 A型・B型事業所見学（車椅子ユーザーメインの就労施設）

こちらの作業所ではラオスにはない種類の仕事も多々あり、また車椅子ユーザーが健常者と変わらない働きぶりを見せていることに、ラオスの人々は驚いていた。ここで働いて給与がもらえるのか、どんな仕組みになっているのか、機械はどうやって買うのかなど 実際に見せてみると疑問が次から次に湧いてきて議論が活発になった。

盲導犬にも初めて対面し、目の障がいの方達が盲導犬とともに出社し歩いている様子を見せてもらった。これに伴い、盲導犬の育成機関があることや引退犬を受け入れる仕組みがあること、犬の健康に配慮されていることなどを説明。

こちらの作業所での視察をヒントに新たな障がい者雇用が生まれることを期待したい。

美瑛町観光協会のアテンドで美瑛を視察。ラオスの障がい作業所では青い花バタフライピーを有機栽培し、静岡のB型事業所で富士山ブルーティーになり、日本ラオス両方の障がい者雇用を支えながら富士山お土産として流通している。

今後、美瑛でも障がい作業所で美瑛ブルーティーを製品化する予定があり、その挨拶も兼ねて各所を回った（残念ながら販売設置する青い池は凍っているため断念した）。

拓真館（美瑛を有名にした写真家さんの展示館）訪問

旭川市内にもどり、神威 車イスラグビーチーム の練習に参加。ボールの投げ方などを教わりながらゲームに参加することができた。普段、活発に運動する機会が少ない足に障がいのあるメンバーにとって素晴らしい機会であった。

1月18日 旭川から都内へ

重症心身障がい児の通所施設・放課後デイ を運営されているFlapyard（療育室つばさ）を視察。呼

吸器や胃瘻などを付ける「医療ケアの必要な子供たち」が通う。

<https://flap-yard.com/>

ラオスでは医療ケア児の命が繋がっていないことから、呼吸器をつけ痰の吸引が必要な人や胃瘻で栄養摂取する障がい児をほぼ見たことがない。次の10年で徐々に医療が進歩し生きることができるようになると推測される。日本でも同様であるが、生きられるようになったあとに「どう生きるか」を考えることのできる社会になっていないと当事者は孤立してしまう。同時に24時間介護になる親達を支える施設を作らなくては共倒れになってしまう。

そういった観点から、未来を見据えて視察に入れたいと考えていた施設の1つである。ラオスの人々は、ボランティアではなく仕事として看護師さんやスタッフさんたちが通っていることが信じられないと言っていた（ラオスでは当事者・当事者家族以外で支え合える場が少なく、他者から介助を受ける機会が少ないことから、想像していなかったようだ）。

さらに、看護師さんたちが病院で勤めずにここを選んだ理由を知りたいと何度も質問が出ていた。この段階で、基本的な福祉の考え方や施設の分類などについて、ラオスのメンバーに混乱が生じていることが予測できた。ラオスに施設がすくないために、年齢・障がいの度合いによって通う施設が違ふこと、配置される職種も違ふこと、それぞれが福祉の専門的な勉強を経て職業に就いていることなど、理解に時間がかかると思われる。

1月19日 3歳—6歳までの発達支援施設（主に知的、ダウン症など）の視察

うめだあけぼの学園 <http://umeda-akebono.or.jp/>

副園長みずから施設の見学・概要説明を担当。モンテッソーリ教育を軸にしており、子供達の自発性を尊重している。笑顔が溢れる子供達の様子から安心して通ってきているのがわかる。ラオスのメンバーからは、ラオスにはこういった専門の施設はなく、もしあったとしたら月に1000USDくらい費用を払わなくてはならないだろう、と予測だった。

日本では利用者負担はなく、どの家庭の子供も通うことができるようになっている。

発達を促す運動具のある体育館、親子同伴での体験給食や、ランチタイム前にお友達の分まで配膳を準備する係の様子なども見学。PT、OT、ST、心理、治療教育士、保育士、児童指導員、視覚担当等による個別支援それぞれがラオスにはいまだ仕組みとしてはないものとなり、なぜ必要なかをゆっくり教えていく必要がある。

分身ロボットカフェ 体験

ALSや脳性マヒの方が在宅でPCを操作し、カフェにいるオリヒメを動かしてコーヒーや食事をサーブし働くカフェ。ラオスでもいつか重度障がいの方がこうした働き方をできるかもしれない！と可能性を感じてもらうために組んだ視察。

Orihime開発者のオリィが登場し、実際に操作する様子を見せてくれ、ラオスでの導入についてラオスのメンバーと直接議論。ラオスのメンバーはコールセンターのような仕事ができないかと積極的に質問を出していた。

ラオスにOrihimeを設置するパターン、Orihimeがラオスの人々の代わりに世界を移動するパターン、どちらも大きな可能性を秘めている。例えばラオスに暮らす障がい当事者がラオスから操作し、ラオス大使館やその他の施設において受付業務や通訳業務を行うことも可能になるかもしれない。

ラオスの場合は道路整備が十分でなく、障がい者の移動支援もないことから、重度障がい者に限らず

身体障がいの方達にとっても就労として大きく活用される可能性がある。

(この様子はNHKワールドに取材された)

<https://dawn2021.orylab.com/>

1月20日 チームラボ バリアフリー体験

完全車椅子の場合は展示1-2は見れず、展示3からの参加。それでも水場に行く用の車椅子を貸し出してもらったり、各展示の入り口でスタッフさんが対応してくれたり、できる範囲の最大限で参加できるように配慮がなされている。車椅子ユーザーの動線も決まっており、他の人々の邪魔にならないよう配慮もありながら、うまく構成されていた。こういったバリアフリー対策・対応もラオスでは体験することができないため、勉強になっていた。

ラオスにいる間は移動がままならず、何かを体験する・参加する が簡単にはできない。こうしてさまざまな体験を経験させることで、チャレンジする勇気を持てるようになりたい(ラオス人の気質もあり、初めてのことにたいして遠慮したり怖がる傾向がある。チャンスを多く与えることで経験値がついていく)

目黒 米山友愛ロータリークラブの皆さんに活動報告

ラオスで障がい作業所を開こう！と始めた当初は足踏みミシンで布製品を作っていましたが、Nuiさんが米山友愛ロータリークラブさんと作業所を繋いでくれて、工業用の立派なミシンを寄付してもらえた(2018年)。おかげさまで分厚い生地を縫えるようになり、工業用のため丈夫で壊れず、ありがたいサポートであった。米山友愛ロータリークラブのメンバーはミシン寄付後に作業所を訪問してくれたが、コロナ禍の間は交流できなかったため久しぶりの再会となった。

ラオスの障がい作業所メンバーから活動報告を行いながら、意見交換。

様々なアイデアがでて、次年度ラオスのイベントを企画してくださることに。

1月21日 御殿場に移動 重度の知的障がいの方が終身で暮らせる施設インマヌエルを視察。50名の方が入所し暮らす。障がいが重度で家族のケアがまわらなくなるケースや、ぎりぎりまで家族で穏やかに暮らしていたものの親御さんの高齢化に伴い40代以降で入ってくる方も。

どの施設でも、親や周囲から愛情をしっかりと受けていると、他者との関係が築きやすくケアしてもらいやすい。そうでないと関わりをゼロから、拗れた糸を解きほぐすところから、のスタートになるというお話が印象に残った。

ラオスにはまだ重度の方達が暮らせる施設は無く、村に閉じこもっている事が予想されます。

ラオスの障がい作業所メンバーから出た質問の中で

親御さんは会いに来ますか？ と

スタッフの皆さんの気持ちをポジティブに保つトレーニングをしていますか、どこでケアについて学びますか？ など本質をついていた。

彼らがリーダーになり福祉を組み立てていけるよう、今回の研修内容と仕組みをまとめてフィードバックしていきたい。

ノースガイアのB型事業所視察。ここではラオスと御殿場の障がい者同士ができることを持ち寄って作っている桜彩てまり や 富士山ブルーティーを製品化している。規模が大きいので障がい作業所として実現は難しいものの、精神障がいのある方達の作業の幅や作ることでできる製品を見学でき

参考になった。

御殿場西高校の高校生たちと交流

御殿場西高校は学園祭でラオスのコーヒーやバタフライピーのお茶を販売し、その収益をラオス支援に充ててくれている。今回は障がい作業所で生まれた赤ちゃん達のためのベビーグッズ購入に活用させてもらった。 夕食後、都内へ帰宅

1月22日 日本の皆さんからご寄付いただいた製品の整理、交流会

ラオスは仏教のため、バリアフリーのお寺を探してもらい、円徳寺 訪問（車椅子で入場可能）

品川 水族館 バリアフリー体験

ともにフリーアナウンサーの山本ミッシェルさんがアテンド。

夕方からサポーターさんたちとの交流会 たこ焼きを焼いてもらったりすき焼きを作ってもらったりしながら今回の研修の感想を聞き取り。日本のみなさんが丁寧に対応してくださり、ラオスのメンバーも安心して交流することができた。

翌朝早朝便のため、早めに帰宅してパッキング作業。

1月23日 早朝便にて帰国

（2）実施成果：

ものづくり、福祉ともに実際に見て感じることでラオスのメンバーの自発的な考え、意見を引き出すことができた。さらに福祉においては「なぜこういう仕組みになっているのか」「どんな人が働いているのか」などラオスで実施する際に参考にできる内容の質問が多数であった。これまでラオスの障がい作業所は日々を食べていくため、生活を支えていくための第一目的であったが、遠い未来を見据えて より良い施設にしていくこと・福祉を教えられる場になっていくこと・利用者介助者の心の安全を保つことが必要 など、意識的に話をすることができた。ぼんやりと持っていた彼らのビジョンが少しずつクリアになってきている。またトイレがないから行くのをやめよう、スロープがないから行くのをやめよう ではなくどう街をよくしていくかの草の根活動も大事さも十分に伝えることができたと思う。

（3）得られた教訓など：

多くの場所を訪問し視察を実施し、ほとんどのものがラオスのメンバーにとって「みたことがないもの」であった。福祉施設やバリアフリーについてもこれまで口頭や文書で説明する機会があったものの、やはり見たことがないものを想像するのは難しかったのだと思われる。そのため事前に聞き取りしても具体的な案が出づらかった。

ラオスのように社会資源が極端に乏しく経験値を積むことが難しい国の人々にとっては 訪問し、話し、触れ、聴いて初めて実感を得ることができるのだと、アテンド側も大きな学びになった。

より多くの経験をそれぞれのメンバーに与えていくことが日本側からできることだと思われる。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

日本の福祉を全て真似できるわけではないものの、基本的な福祉の考え方、どんな施設が存在しているか、障がいの度合いの分け方、それぞれに必要な福祉スタッフの種類 など難しくすぎない程度にレクチャーを続けていきたい。基本的には障がい作業所メンバーが対象であるが、外部の学校の先生なども、希望があれば参加できるようにしたい。

まずは情報を提示して整理した上で、作業所として何に着手していくかを話し合う。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

- ①車椅子ラグビーや電動車椅子の試乗など、ラオスのメンバーの表情がいきいきとしていた。ラオスでは体を動かしたり自分の意思で出かけたりが少ないため、こういったアクティビティの重要性を感じた。
- ②日本とはいえ、車椅子移動はかなり大変で人手と時間が必要。毎回3名の誘致が目一杯かなと思われる。
- ③生活上（お風呂、洗濯、食事など）は問題なく過ごすことができてよかった。ものづくり指導を中心に、と思っていたが結果的に福祉施設への興味が深く福祉視察を増やすことになった。

(2) 活動の写真



活動報告会



活動報告会



旭川 雪上のバリアフリー体験



旭川 パラ活センター



旭川 車椅子ラグビー



分身ロボットカフェ 開発者オリィと

(3) JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

開催してみるまで彼らの意識がどう変化するか、何に興味を持つかが難しかったが、こうして実施させてもらうことで彼らの思いや希望に寄り添うことができた。また、普段ラオスに行くことは難しいが、国内でボランティアしたいという日本の皆さんが人手・物資などで協力してくださり、輪が広がった。